

槐

かい

岡井省二創刊

令和元年7月号

令和元年七月一日発行 第二十九巻第七号 通巻第三三七号 (毎月一回) 日発行
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



月日貝

高橋将夫

それとなくレタスにくるむ恋心
初蝶や愛は磁力を凌ぐらし
蛇穴を出て美しき人に会ふ
蛭烏賊深海の闇つれて来し

春の闇には UFO も妖怪も
雉の声母の強さが思はるる
草の上をころがる帽子春の風
春の波バイオリズムに乱れなし
割箸がきれいに割れて花菜漬
どの道も彼の世への道風光る
月日貝戻らぬ日々を殻に秘め

槐安集

水野恒彦

春秋の吉顔さくらさくらかな
春惜しむ八十路の雨のとめどなく
春光や波の宝石かぎりなく
蠢きて夜更けに春星きらきらす
飛花落花いつしか俳句流れ出し

加藤みき

この部屋に芭蕉青葉と人を待つ
たくさんの櫻葉降る夜なりけり
はんざきのやさしき貌に油断して
夏鶯実生の楨の育ちをり
雨にはか芭蕉の花の太くあり

中島陽華



春色のてげてげもじよか空也蒸
目眠れば 天空に 声鷹渡る
ドクトルも牡蠣の土手鍋覗き来る
ぽよよんよん神代杉に雪の華
練り物にアシある博多おでんかな

竹内悦子

春蘭や紙の袋に陀羅尼助
春はももいろ鏡の中に雅のこゑ
花の夜の高きに掛けて翁面
甘藍に動くものあり穴あまた
米櫃を洗つてをるや鳥雲に

雨村敏子

ヒヤシンス朝のひかりの群青に
花曼荼羅ホモサピエンスを席卷す
この先の大事八重櫻満開
卯波寄す盆のくぼにも海馬にも
惜春や胸中にある谷の音

本多俊子

梅が香に心の髓を洗ひけり
春昼や擱むものなき象の鼻
深海魚いつか来てゐる立夏かな
小鈴みな鳴り出しさうな花馬酔木
夢の世の触れて冷たき藤の房

近藤喜子

青麦や疲れを知らぬ頃のあり
春愁や想像できぬ近未来
風光る宇宙と共に息をして
虻一匹に乱れたる坐禅かな
逃水や時に危ふき思ひ込み

瀬川公馨

彼岸会やああ青春の鱈のあら
令和てふ元号もちき春の虹
カジモドの哀しうたごゑ飛花落花
散りがての花が野太鼓呼んでをる
行く春や彼女だんだんマニッシュに

柳川 晋

踏絵なりグループライン開くのも
櫻鯛ばかりと開けし顎かな
花ごろも連山影を柔らかく
風光りブラックホール際立てる
金田一耕助の行く獺祭

熊川 暁子

己が色こぼさぬやうに初蝶来
春風に逆らひてみし乗りてみし
この世から片足出して朝寝かな
さくら吹雪空は静かに混み合へり
あをあをとこ糸をあげぬる泉かな

江島 照美

春炬燵離婚語の始まりぬ
葱坊主野生児とんといなくなり
撓垂るる桜の枝に子供服
過ちもさらりとすてし噴雪花
春の波血に勝りたる愛のあり

寺田 すす江

退屈な貝の潮吹く花曇
花あかり大樹の虚うつろの霧りかな
読みさしの本のぬくもり目借時
春眠の無重力になる夕べ
みんなみの風より生まる桜鯛

岩下芳子

さらさらと櫻葉ふる通学路
居眠りの目玉貸し出す目借時
長閑けしや獅子を下りたる文殊さま
浦安 国の風聞く葱坊主
近寄ればもの言ふごとく春の鹿

有松洋子

げんげんの花環の中に比叡山
美しきものは恐ろし飛花落花
快癒へと日日新しき春の風
のどけしや丈の揃はぬ土手の草
生き方のいまだ不器用竹の秋

岩月優美子

誰彼も主役なりけり花のころ
風光るカリヨンの音の響みけり
行く春や平成の文字懐かしむ
名声も最後は孤独花は葉に
春愁や胸の内なるさざれなみ

近藤紀子

スマホ握る心をどりや花万朶
下闇の途切れしところ待たれをる
今年竹のさやぎありける静寂かな
春シヨール鼓動をふはりつつみけり
花の下介護の話盛りあがる

竹中一花

ゆりかごに青葉の光揺れてをり
脚光る水切石の黒もまた
しろがねの光の奥へ鳥帰る
梅の実や音からからとみくじ箱
この日から祇園の子とや櫻鯛

前田美恵子

圧射跡今も残るや櫻草
荒削りの仏影待つ春の月
足取りの軽き少女や春の泥
持ちなほす力ありけり風車
小手毬の撓り大きく城堀へ

中田禎子

まなざしは十万億土花の扉
現はるる三人の翁花篝
夜桜や根付の夜叉の揺れてをる
白砂に影のありけり花衣
方舟のただよふ宇宙五月富上

吉田順子

光陰の刻のうちそと藤の花
頬白の声聞き分けし雑木山
水芭蕉の命たくまし見る触れる
春の滝笈相打つしぶきかな
暮れぎはの特に連翹あかりかな

槐市集

阿部さちよ

雪解水流せぬ炉心核デブリ
陽炎となれぬ廃炉の現かな
はやぶさのりゅうぐう姫へ春のキス
眼に見えぬ^眸日の星のごと春のテロ
病む人のこころ潤す春の水

中堀倫子

雨ふりて客あしわるし浅き春
薄氷の電光石火目くらまし
あちこちで選挙事務所^の春の朝
掌のハンドクリームあたたかし
うららかに流るる光小さき川

橋本順二

春の鳶空の高さを使ひきる
饅頭に朱の一刷けや櫻東風
桃の夜塩味効いてをりにける
陽炎や幸福駅の切符手に
かかへたるチェロに腰あり春の夜

平野多聞

平成と令和の狭間菊根分
春満月大き天窓開きけり
羽撃きは別れのこゑか鳥雲に
飛花落花そのひとことが身を冷やす
一碗に結ぶ万人さくら餅



藤田美耶子

黒松のはがれし木肌冴返る
花の雲扇のごとし吉野山
七曲り行けば谷より花の風
鯉の背に紐となりけり花の帯
遊覧船花の浮輪を残しけり

三浦純子

病癒ゆやすらふ風の四月かな
鶯の次の声待ち耳澄ます
うららかや富士の裾野はどこまでも
春潮や越前岬の海の色
白椿窓辺にありて匂ひ濃し

三木亨

春の宵ゆつくり伸ぶる滑り台
御目見得の花見風のあだつぼさ
千金の宵を待てぬか恋雀
はなびらが軽みの中を漂へり
花糸んど夜の火焰を舞ひ契る

安野眞澄

乗りつぎて青春キップ春をゆく
情念の炎のごとき薔薇真白
黄水仙大島トルコ記念館
引潮に奇岩数多や春の海
言霊と思うて拾う櫻貝

柳橋繁子

切株に新たな生命花吹雪
夏立つや天地無用の宅配便
眼裏の兄と語らふ花の下
春雷やボンボン入れに菊の紋
花冷の四阿にきく三重奏

山田佳子

風の音吾も櫻も過客かな
囀りに私の一ト日始まりぬ
春雨の清水五条は茶碗坂
麗かや山間をゆく宅急便
そこここに水音のありて進級す

槐集

高橋将夫選

引鳥の果てや無辺の潮ぐもり
大阪 平野 多聞

青銅の竜の身ぬけて春の水

いのち抱く渾身の色桜鯛

天と地の間合をはかる半仙戯

リュウグウノツカイと踊る春の夢

綿菓子へ巻きとられける花の風
枚方 阪倉 孝子

かごめかごめ後ろは春の歡喜天

枝垂櫻分け入りてより天女なる

陽炎へ捨ててに行きたき物ありぬ

とどまらぬ回転木馬春深し

銅鐸の木霊めざめり春の風
大阪 藤田美耶子

西行の言の葉まとひ桜舞ふ

飛花落花世の混沌を祓ふかに

花疲れこの世の道をさ迷へり

ふるさとの春日に抱かれ蕪村の碑

大根の花の白さと正直と
竹原 久保 夢女

てふてふの目差す高みは南無觀世音

心なき花にこころを寄せてをり

手の内はハートのエース花の冷

花浄土笑顔が似合ふ吾となり

シルクの風受けし光や朝櫻
枚方 中 貞子

げんげ田に脳天ゆるる怖さある

ひばりよひばり吾も泣きたき時もある

生きざまに賞罰のなし雪柳

熱き思ひ日暮は閉じよチューリップ

土筆煮る湯気に故郷うかびけり
岡崎 柴田 靖子

古草や思はぬ力秘めてをり

花月夜ニフ乱舞のときとなる

青年の旅はつらつと柿若葉

青空を湖と思ひし鯉のぼり

銀河往來

◆ 槐集觀照

いのちを抱く渾身の色桜鯛 平野 多聞
生命感と躍動感の溢れる一句。もの、この本質に迫るとはまさにこのこと。

〈青銅の竜の身ぬけて春の水〉はまるで春の水が生きた竜の身体を通り抜けたような柔らかさを感じさせる。

〈天と地の間合をはかる半仙戯〉の句、ぶらんこの揺れを「天地の間合を測る」と見たのはこの作者ならではの視点。

〈リウグウノツカイと踊る春の夢〉はダンスをたしなむこの作者ならではの夢。

〈引鳥の果てや無辺の潮ぐもり〉の句は人生のはるか彼方を一心に凝視している。

陽炎へ捨ててに行きた者物ありぬ 阪倉 孝子
陽炎に捨てる物は何か。陽炎に捨てられるとどうなるのか。どこか不思議な一句。

〈かごめかごめ後は春の歡喜天〉は、「かごめかごめ」の童謡と歡喜天の取り合わせが絶妙。

〈枝垂櫻分け入りてより天女なる〉、櫻のもとで天女になった気分を満喫といったところ。

〈綿菓子へ巻きとられる花の風〉の句、なるほど「花の風」なら巻き取られて綿菓子になりそう。

飛花落花世の混沌を祓ふかに 藤田美耶子

「混沌を祓ふ」と言われて、改めて無心に飛び交う飛花落花を思い浮かべた。花吹雪がおさまったとき、混沌も納まる。

〈銅鐸の木霊めざめり春の風〉は深淵な精神の風景。

花浄土笑顔が似合ふ吾となり 久保 夢女
満開の櫻のもとではにかむ作者の笑顔を見るような一句。

〈心なき花にこころを寄せてをり〉は心をひく一句。

ひばりよひばり吾も泣きたき時もある 中 貞子
晴れやかな雲雀の鳴き声と「泣きたい気持」とのギャップ、そこに作者の云うに言われぬ思いが込められているのだろう。
〈熱き思ひ日暮は閉じよチユリリップ〉は精神の若さ。

古草や思はぬ力秘めてをり 柴田 靖子
古草は夏草、秋草が冬を生き抜いて春を迎えたもの。春の若草に混って生きる常緑の多年草には力強さを感じさせられる。

臘夜やすぐに出てこぬ役者の名 時澤 藍
加齢のせいもあるが、この頃はスターや芸人が星の数ほど出てきてとても覚えきれないし、思い出せない。全くその通り。

〈夜桜や年甲斐もなく拗ねてをり〉は共感を覚える一句。

花咲くや野暮な男の優しくて 竹村 淳
自分のことではないかと思う人が居そうな句。

〈以下略〉